

NPO 純正律音楽研究会会報 ～2011年10月発行～

ひびきジャーナル



〒106-0031 東京都港区西麻布 2-9-2 Tel:03-3407-3726

Fax:03-3797-5640 e-mail:puremusic0804@yahoo.co.jp

No.30

発行日 平成23年10月25日
発行責任者 玉木宏樹
編集 NPO 法人 純正律音楽研究会
玉木宏樹・相坂政夫



日一日と気温が下がり、秋深くなってまいりました。夏の猛暑が嘘のような芸術の秋です。皆様お元気でお過ごしのことと思います。ひびきジャーナル No.30 の発刊です。今年から、「純正律音楽入門セミナー」を毎月開催しています。当初は、当会の狭い事務所で開催し、7～8人で一杯になってしまいましたので、余り告知をしていませんでした。先月9月のセミナーからは、事務所近くの喫茶店「フレンズ」で開催しております。20人前後の参加が可能になりましたので、是非一度ご参加下さい。11月19日土曜日、12月17日土曜日いずれも午後2時から約2時間です。参加費1,000円(会員特別価格500円)1ドリンク付きです。また、節電の関係で都電貸切コンサートが当分の間、開催出来なくなりました。今年は11月26日土曜日のハープとヴァイオリンの純正律音楽コンサート(ラリール)が最後になると思います。ご参加頂ければ幸いです。

♪巻頭対談♪ 私がハーピストになったわけ

ハーピスト 三宅美子
玉木宏樹

三宅さん：お久しぶりでございます。

玉木：久しぶりだね。いつ以来かな？

三宅：5月28日のコンサート以来ですね。

玉木：そうそう、そうだったね。

ところで、今度のコンサートは11月26日
だったね。

三宅：そうです、よろしくをお願いします。

玉木：未だ、曲目を決めていないね。ここで決めても
いいんだけど。

前は、震災以来初めてのコンサートだったね。

三宅：そうです。

玉木：こないだはマスナーのタイスやったりして、グランドハーブでミーン
トーン(※)でやったけど、きれいだったでしょう。

三宅：とてもきれいだった。

玉木：もともと、ミーントーンはきれいなんだけど。

三宅：アイリッシュハーブはボディが小さいから倍音の量が違うでしょう？
グランドハーブは大きいので、ミーントーンにチューニングするとよけ
いきれいになる。楽器に慣れていることもあると思うけど。

玉木：曲にもよるけど、ミーントーンでグランドハーブでやった方がいいと思
うよ。

三宅：レバーの操作と言うのがネックなんですよ、アイリッシュハーブって。
使う音だけ変えればいいのですが、主に左手でレバー操作するのでその
間、左手が使えない。もっとも私が、アイリッシュハーブを殆ど奏いて
いないから慣れてないだけなんですけど。

玉木：今度はグランドハーブだけでやるか。

三宅：アイリッシュハーブを入れるんだったら、早く曲目を決めてもらわない
と。アイリッシュは全然弾いてないから。



玉木：じゃ、グランドハーブだけでやろう。

三宅：私、アイリッシュハーブって、トラウマになっているの。

玉木：どうして？

三宅：中学生の夏休み、足を捻挫してバスケット部の練習に出られなくて退屈だったので、カルチャースクールのアイリッシュハーブの講座に参加したの。ところが10人くらいがいっせいにペンペン、ペンペンと、まともなチューニングもせず弾くものだから・・・それ以来トラウマになっていました。

玉木：それじゃまるで大正琴みたい(笑い)。ところでハーブはいつ頃から始めたの。

三宅：高校の1年生終り頃から。

玉木：最初はアイリッシュハーブからなの。

三宅：いえ、アイリッシュハーブはさっき言った中学の時に2~3度さわっただけ。高校に入ってからN響定期で桑島先生のハーブを聴いて、グランドハーブをやりたいと。最初はグランドハーブなんかすぐには買えないからアイリッシュハーブを譲ってもらって、グランドハーブのつもりで練習をしていました。その内桑島先生が家に来て練習しなさいと、お宅のレッスン室の鍵まで貸して下さって練習をしました。家ではアイリッシュハーブ。ペダルが無いので、マッチ箱を7つ足下に置いてペダルを踏んだつもり、音は変わったつもりとして、練習をしてました。レバーはほとんどつかっていませんでしたね。

玉木：なるほど、ごまかしてやっていたんだね。

三宅：芸大の大学院の先輩からも「空いている時は使っているよ」と言われて、桜台のお家で何度も練習をさせて頂きました。いつも「おやつ付き」だったんですよ！

この前二台ハーブの企画をしていて、アイリッシュハーブとサウルハーブ（アオヤマハーブの小型のアイリッシュハーブ）でデュオを入れようとして「ミーントーンに調律したら綺麗よ」と言ったら、「ん・・・？」意味不明で通じなかった。

玉木：それは意味不明になるだろう。ピアノの人もミーントーンで何？だから。でも、さすがに古楽をやっている人は敏感だよ。だんだん知られてきているけどね。

三宅：今、流行ってきているけどね。

玉木：そうなんだよ。いま我々は先駆者の方だよ。未だ私が始めてから10年位のものだからね。

三宅：そうなんだ。

玉木：話は変わるけど、貴方はメンタルヘルズの講師をやっているの？

三宅：日本メンタルヘルス協会というのがあって、1年位通ったことはありますが、講師でもなんでもありませんよ。

玉木：どうゆうことをやるの？

三宅：カウンセリングをするのに、いろいろな方法があるじゃないですか、音楽療法とか、色彩とか、どうやって受け答えするかとか、私はダイジェスト版2004年頃かな、1年行きました。

玉木：今度、僕が純正律についての本を、雑誌「壮快」関係の出版社から出すので、もし関係のあるようなスジの話が出来るかな、とっていたんだけど、あまり関係なさそうだね。

三宅：生徒のレッスンではカウンセリングが役立ってますが。

玉木：話は戻るけど、高校1年の終り頃から始めたの。

三宅：そうです。桑島すみれさんがN響と芸大の先生になって間もなくの頃から習っていました。美智子皇后さまよりすこし後からです。

玉木：それから芸大に入って。

三宅：その前に、N響の桑島先生に、どうしてもハープをやりたいと、手紙を出しました。そしたら、すぐに返事が来て、親と一緒に来なさい、という返事が来ました。

玉木：親は音楽をやることに関してはどう思っていたの。

三宅：ぜんぜん。父は音楽好きだったけど、音楽家にする気は無し。隣のお姉さんのお供でピアノのおけいこには行ってましたが。お琴には憧れてたけど。ただピアノの先生は「音楽の方に進んだらいいなあ」と思って母に勧めたそうですが、「普通に区立中学へ行かせます」とストップがかかり、私には何にも伝わらず。高校受験やテストの前でもお稽古は休まず、いい加減な練習だけど、楽しくピアノを弾いてました。親戚の子が桐朋学園でピアノをやっていたのを聴いて、レベルが違う、別世界だと思いました。でも高校入った時に漠然とハープをやりたいなと思って。

都立駒場高校に芸術科がまだあった頃で、音楽科の先生が「貴方は手も小さいしピアノは無理だけどハープはいいんじゃない？」と言われすっかりその気になって。

玉木：おもしろいね。

三宅：先輩に芸大に行った人がいて、芸大に連れて行ってもらったりして、桑島先生を紹介してもらいました。親は大反対でしたから、私が桑島先生に手紙を出したら、すぐに返事が来て。親は手紙を読んでしょうがなく、私を桑島先生のところに連れていったんです。先生が「ハープを弾いたことは？ここで弾いてみなさい」と言われて、ポロンポロンと弾いてみると「あっこれじゃダメ。ゼロからスタートしましょう」といわれました。私はまだ芸大に行くことも、ハーピストになることも考えてなかったのに、先生は何が何でも芸大に入れると思われたようです。「せめて3年早く始めていたらね」と言われました。

玉木：前に聞いた話だけど、うまいぐあいに年代的に大変良かったんだね。

三宅：現役で入らなければ、来年、再来年と優秀な人が入ってくるので、二浪以上は覚悟しなければならなかった。先生は何が何でも現役で入れたかったようです。ちょうど最上級生の学年に生徒がいなかったんです。その当時は全体で10人くらいの生徒しか取れなかったようです。という訳で、私は高校1年生の秋からレッスン始めて即受験勉強。実質2年しかありませんでした。

玉木：それは珍しいケースだね。

三宅：先生の方も賭けだったと思います。ただおもしろかったのは、芸大に会いに行きレッスンを聴かせていただいた時に、なにげなくメトロノームをカタカタやって、「いくつだと思う？」と聞かれたり、テストをされてみたいですね。ここで余り外れてはいなかったんだと思います。最初からとても良いメソッドを教えてもらったのと、私が全くハープを弾いてないに等しい、ゼロ、白紙の状態だったから「まるで真っ白な吸い取り紙のようだった」と言われました。

玉木：何でもスルスル入っていくね。

三宅：そうなんです。やりたい気持ちがあったから、他の生徒、大学生や大学院生のレッスンを見学させていただいて、吸収しましたね。自然と覚えていきますよね。先生のアンサンブルの練習も譜めぐりさせられて、勉

強になりましたね。先生のお宅でも「おやつ付き」でした。

玉木：それはそうだね、俺はいつも言っているんだけど、親が強制的に子供にヴァイオリン弾けとか、ガタガタ言ってもダメだよ。本人がやる気を起こさなければ。

三宅：ハープをやりたいと思い始めた15～16歳の時は、まだハープのペダルのことも知らないし、自分でチューニングしなければならないなんて、全然考えてない。ただただ、ハープを弾きたかっただけ。曲もほとんど知らなかったし。

玉木：なるほど。でも良かったね。

三宅：ほんとに良かったです。田園調布の先生宅や桜台の先輩の家とか、学校帰りに渡り歩いて練習をさせて頂くんですが、1～3時間位しか練習出来ないから、集中しますよね。

玉木：まあね、集中力を発揮する時間は難しいんだけど、うまいこと行けばすごい上達するしね。集中力の無いやつは何をやっても上達しないね。

三宅：今はもう、私、集中力ないね。(笑い)

玉木：いま、僕は集中力を発揮しなければいけないんだ。お箏とオーケストラの小協奏曲を書いているから。

三宅：ええ、お箏？ お箏をオケでやるのは大変じゃないの。

玉木：お箏の曲は一杯書いているんだけど、オケは初めてなので、バランスが分からない。尺八とかだと未だ分かるんだけど、ホルンや打楽器を入れるとか、言われて大変です。洗足音大のオーケストラ用なんだけどね。お箏が潜っちゃったらどうしようと。

三宅：お箏はマイクとかで音を取らないと無理でしょう？

玉木：いや、そんなことはしないように書いているから。オーケストラと一緒にやる所はほとんど無いし。

三宅：お箏は一面ですか。

玉木：一面だよ。それが、そのお箏が上手いんだよ。あれは化け物だね。

三宅：若い人なの？

玉木：若いって、大学院生だよ。

三宅：すごいね。

玉木：出はどこ？ と聴いたら、福島県の会津だった。
ところで、芸大卒業してからどうしたの。

三宅：在学中に群馬交響楽団や日本フィルにエキストラで行ってました。卒業演奏を聴いたと木村茉莉さんから電話がかかってきて、新日フィルにエキストラに来ませんか？と言われて私と桐朋学園の山口裕子さん2人を一年間使って頂いたんです。でも芸大ってその頃はオーケストラの授業ってほとんどハープの入らない曲ばかり。ほとんどやっていないじゃないですか。

玉木：やっていないんじゃないかと、教えないの。

三宅：3.4年の時は、芸大オケでも弾かせてもらっていたけど、みそっかす扱い。桐朋学園はレベルが全然違うと、完全に自信喪失。もともと勉強不足なんですけど、オーケストラでやっていくのは無理だと思いました。

玉木：それでオーケストラには入らず。

三宅：そのあと、東京交響楽団とか新星日響で使ってもらったりしていました。日本のプロオケはほとんど行ったんじゃないかな？でも、フランクフルト放送オケが日本に来た時、急に頼まれたんですよ。ベルリオーズの「幻想」で。いやー、オケってこんなに弾きやすいんだ！って嬉しかったですね。自由になれる。音で会話できる！楽しかった！

玉木：向こうのオケはサバサバしているでしょう。

三宅：その通りです。

玉木：人間関係がごちゃごちゃしていないから。

三宅：ドイツ語は解らないから、何にも気にならない。良ければ良いと言ってくれる。

玉木：それが一番よ。

三宅：オケはハープの出番が少ないので、その間、いろんな音が聴こえて、大変勉強になります。今度のコンサートはフルに出ますのでよろしくお願ひします。

玉木：こちらこそ、よろしくお願ひします。

皆様、今度のコンサートは11月26日土曜日、茗荷谷のラリールにて。今年最後の「ハープとヴァイオリンの純正律音楽コンサート」です。是非ご来場下さい。

※ 解説

ミーントーンとは中全音律といい、1500年代末から、1800年ころまでの

標準的な調律法。1 オクターブ内に 12 個しか鍵盤のないチェムバロで、何とかして純正律に近づけるため、「ドミソ」の「ミ」を純正に取り、5 度を少し狭める。この結果、6 つの調の「ドミソ」は純正律に殆ど近くなる。しかしそれ以外の調では響きが崩壊する。この調性の範囲を自由にするために「平均律」が流行しだした。しかし「ドミソ」以下、すべての響きの純粹さが失われてしまった。

ムッシュ黒木の純正律講座 第 30 時限目 平均律普及の思想的背景について(19)

純正律音楽研究会理事 黒木朋興

レトリック研究はなぜ文学研究者に嫌われているのだろうか？ それは文学史という歴史＝物語を正当化するためだったのではないだろうか？

そもそも文学（英：literature, 仏：littérature）という概念はそれほど歴史の古いものではない。少なくとも 18 世紀以前に遡ることはないのだ。もちろん、現在の意味で文学作品と認められるものは古代の昔より存在している。しかし、それらを包括する一つのジャンルとしての文学という用語が確立するのは 18 世紀から 19 世紀にかけてのことに過ぎないのだし、古代から現在に至る文学作品を時代順に並べた文学史という講座が始まるのは 19 世紀末から 20 世紀にかけてのことなのである。

この時代以前には、言語教育はレトリックの名の下に行なわれていた。レトリック教育において求められたものは、着想し、章立てを組み立て、文章を推敲し、それを覚え、人前で発表して聞く人を説得するという総合的な言語技術であった。そしてその技術を身につけるために参考として挙げられるテキストは、当然、現在でいう文学作品に特化されていたわけではない。それどころか、レトリック教育における主要なお手本は、政治あるいは法に関するテキストであったのである。文学はあくまでも瑣末な分野に過ぎなかったのだ。そもそも、レトリックの講座とは、現在の高等教育＝大学教育における教養課程に相当していると言える。働いて食い扶持を稼ぐ必要のない貴族はレトリッククラスの終了とともに学業を終え、手に職が必要な大ブルジョアの子弟は医学部や法学

法学部に進学し職のために必要な専門知識の獲得を目指したのである。この状況下、文学部はまだ存在してはいない。19世紀前半に小説の創世主の1人であるバルザックにしたところで、大学で学んだ場所は法学部であった。

対して、大学において文学教育が始まるのはレトリック教育が終焉を迎える19世紀末から20世紀にかけてのことだ。この時期、文学史という講座を解説した立役者の1人にギュスターヴ・ランソンがいる。彼はフランスという国が誇る文学者、あるいはフランス文学に大いなる影響を与えた作家をチョイスし、時代ごとに並べてたて、フランスという国の文学の歴史を叙述しようとしたのである。その歴史において、フランス文学の作家達は豊かな知的土壌を誇るフランスという国民国家を彩る英雄として列聖化されることになる。当然、当時勃興したフランス・ナショナリズムと連動していたことは改めて言うまでもないだろう。こうして偉大なる作家達の伝記的事実を検証し、作家の意図を尊重し、それを探ることを目的とした作家研究が開始されたのである。対して、レトリック教育においては、作家の伝記的事実が参照されることはあっても、目的は決して作家の意図ではなく、学習者自身が相手を説得出来るような言語技術作家達の先例を参考にし身につけることであったことを言い添えておく。

そのレトリック教育は19世紀末に一気に廃止へと追い込まれる。それはレトリック教育がアンシャン・レジーム期の教育システムであり、王制や教会勢力と分ち難く結びついてきたために、保守的で権威的な教育法だと見なされたからに他ならない。レトリック教育はまさに過去の悪しき時代を象徴する講座だったのである。



「Musica おおた」の音楽よもやまばなし
♪今は懐かし、オーディオの世界♪

純正律音楽研究会 正会員
音楽事務所 Musica おおた
廣川 深

今回のテーマはいままでとちよっと違う音楽の世界である。私はいくつかの趣味を持っているが、オーディオはそのなかの一つである。いや、一つだったと過去形のほうがよいかもしいない。私の世代のオーディオ技術はアナログの世界。いまでももちろん音については人一倍、いや二倍も三倍もこだわりはあるが、オーディオ技術や機材については昔ほど凝ってはいない。私が音楽からオーディオ、そして音響工学の世界へ手をのばしていったキッカケ、それは.....。

昭和40年代にさかのぼるとしよう。中学時代、自分専用コンパクトステレオを買った。今では見かけないが、プラスチックのケースに20cmのターンテーブル、圧電型のピックアップ、小型の真空管アンプ内蔵、スピーカーはこれまたプラスチックのキャビネットに10cmくらいのフルレンジというシステムであった。しばらくはこれで結構いろいろと聴いていたが、我が家に昔からあるステレオと比較するとなんとなく物足りない。そのステレオは、昭和37年に父が購入した、ビクターのSTL-650というもの。当時のビクターの代表機種であり、結構良い音だった。(10年くらい前まで使用可能だったが、引っ越しで処分した)こうなると自分の装置を少しでも良い音にしたくなる。前回書いたとおり、科学少年であった私は、まずピックアップの出力を直接取り出せるように改造。そしてアマチュア無線の雑誌で安いアンプ(三千元)を見つけ製造元まで行って購入。UNITECというブランド(まず知る人はいないだろう)で、行ってみてビックリ。コタツを囲んで数人でハンダゴテ片手に組み立てている100%家内工業であった。そして近所の電気屋で中古のスピーカーを入手し、それらでシステムを組んで聴いてみるとなんと感動的な音。なんと素晴らしい臨場感。(いままでと比べ)これがオーディオの世界に足を踏み入れたキッカケであった。それからというもの、買い換え、買い増し、改造など、少しずつグレードアップ。

そして大学を卒業。当時のオーディオマニアに大流行であった生録音にも手を出し、2トラック 38 cmのテープデッキを買い込み、コンサートなどをずいぶん録音した。

昭和 55 年頃。この頃からオーディオだけでなく、もっと広い音響の世界に目を向けるようになった。音の世界にもいろいろな分野がある。物理学としての音響工学、電気音響、音響心理、建築音響、そして音楽のための音楽音響学等々である。楽器学も、音律の研究もこの音楽音響学の分野である。また、オーディオの世界にデジタル技術が広がっていったのもこの頃からだろうか。車でなければ運べなかった重さ数十 kg のテープデッキで録音したのと同じ音質、いやそれ以上の音質で、現在ではポケットに入るレコーダーで録音できるのである。まさにデジタルオーディオさまざまというところであろうか。とは言え、音楽はやはりアナログの世界。空気の振動を耳で聴くのだから、そもそも自然界にはデジタルはほとんど存在しない。自然界のデジタル信号を探せば、心臓の鼓動くらいのものだ。したがって、音を保存または伝送する技術としてはデジタル技術は素晴らしいと思うが、音楽音響においてはやはりアナログの世界なのである。

中学時代からのオーディオ好きは私の音楽にも大きな影響を与えてくれた。低音（ベース）の大切さをはじめ、さまざまなことを知ることが出来た。なによりも、いろいろな音楽をそれなりの音質で聴けたことは最大の収穫である。私が昔のオーディオの話を始めるとキリがないのでこのくらいにしておこう。

前述の 3 千円のアンプは記念として保管してある。(40 年以上前の製品だが、完動品) 今は 15 畳ほどの自宅音楽スタジオで、ボーズの小型のスピーカーで楽しんでいる。これからもアナログオーディオを大事にしていきたいと思う。



爆睡中 (純正律音楽ペットコンサートにて)

玉木先生と私

純正律音楽研究会 正会員
常重一志

玉木宏樹先生との出会いは20年も前であろうか。以前私が勤務していた会社の社長と、その会社を辞めたあとも個人的に付き合っていて、その社長に「純正律のコンサートを一緒に聴きに行こう」と声を掛けられ、「じゅんせいりつ」の言葉もわからないまま同行した。演歌なら大丈夫だが高尚な音楽に興味のあるほうではない。「平均律と純正律」と言われてもわからないのだが、好奇心だけは持ち合わせているのでコンサートに出かけた。コンサート終了後に先生を紹介されたが、会話の中身も覚えていない。

その後私自身も会員になり、小さな会場でのヴァイオリンとミニハープとのジョイント、琴とのジョイントなどの「純正律コンサート」に出かけるようになった。そのコンサートで、演奏前に玉木先生から「純正律とは」と、ヴァイオリンを弾き、何とかという器械で「ドミソ」など和音を奏でながら説明を受ける。音楽に素養のない私には、和音がどのと言われてもあまりピンとこない。でも「自然界の音や、人の声は純正律に則っている」と言われて改めて聴いてみれば、すごく自然で違和感なく聴き易い。その場で、先生のCDを買って帰り、家で聴いてみても実に良い。「天の川」「源氏物語幻想」など何度も聴いてみる。



そうそう、私のCDを聴く場面は、枕もとに置いた年代物CDカセットで寝る前が多いが、あまり時間を掛けずにスーと眠りに入っていく。とくに「天の川」では、いつもCDの最後まで聴く前に安らかにお眠りなのである。先生に対して失礼この上ない無作法をお許し戴きたい。

「春へのあこがれ」はモーツアルトの曲を集めたCDだが、ミーントーンで調律されたそのCDを私も心地良く聴かせてもらっている。モーツアルトはミーントーンを愛したということらしく、「純正律」はずい分昔からの音律法だったのがよく分かった。

話は変わるが、先生との関係で不思議な縁もあった。いまは1児の母親とな

っている旧姓Kという女性から「純正律」という言葉を聞いた。その女性は私が勤務していたPR会社の後輩で、部署は違うがよく飲んだりした女性だ。「どこに再就職したの？」と聞いたら聞いたこともない事務所を言った。場所は西麻布という。話をしているうちに「純正律」という言葉が出てきた。そこで私は「玉木宏樹という人か？」と聞き、彼女は「そうだ」と答え、「先生の事務所に入って、PRなどの事務をやっている」と言う。純正律に興味があって入ったというより、PRができるからというニュアンスだった。先生と親しくなれたのもそんな一件があったからかもしれない。

私自身、音楽の素養がないだけでなく、楽器の1つもできない。東京芸大を出て、昔は山本直純さんにバッチリ鍛えられたそうだが、テレビやラジオでお馴染みの曲、CMの曲などを数多く作曲し活躍した玉木先生は、私の「範疇」の人ではなかったはずだ。しかし、ある出合いで知り合い、コンサートに行くうちに酒を飲む機会にも恵まれ、すっかり「玉木ファン」になってしまった。事務所近くの喫茶店での企画会議で、私が他愛なく口に出した「都電貸切コンサート案」が主要メンバーの奮闘努力により実現したのは望外の感激であった。この案が採用になったのも、玉木先生が「鉄ちゃん」（鉄道マニア）ぶりにあったからかもしれない。都電の車内の揺れに耐えながら、ユーモア溢れるトークとヴァイオリンの演奏は、何度聴いても心地良い。ミニハープや琴とのジョイントも素晴らしい。コンサート後の三ノ輪あたりでの慰労会（呑み会）も楽しい。東日本大震災が引き起こした福島原発事故の影響での「節電」のため都電コンサートは当分の間休止とのこと。再開が待ち遠しい。

ただ、私の都合でこのところ欠席気味で、先生に会っていない。9月19日のサントリーホールでのコンサートで、遠めに見た先生の姿にやや元気がないような気がした。大丈夫なのでしょうか。



連載【純正律音楽と寺垣スピーカー】

純正律音楽研究会 正会員
(株) ABSネットワーク
会長 林 盛良

ネコとウサギの睦まやかな関係

前回の会報で、「純正律音楽と寺垣スピーカー」について書いたところ、お読みいただいた方から何件かご質問をいただいた。その中の多くは、「大きなネコと小さなウサギ（2匹ではなくフタリ）が仲良くしている筈はないから、宣伝に掲載しているものは合成写真ではないか」というご質問だった。機会があればフタリが仲良くなった経緯についてご説明する旨述べたが、面白そうなので是非書いて欲しいというご要望もあり詳述させていただくことにしたい。また、寺垣スピーカーの音声に他の動物はどのように反応するかも誌面の都合で割愛してしまったので、今回これまでに分かったことをお伝えしたい。

常識的に判断すれば、「肉食獣の体重6.5Kgもある猫（名前＝ミロク）が草食動物のわずか1kgしかないウサギ（名前＝モカ、種類は1kg以上に成長しないネザーランドドワーフ）をいつか襲うのでは？」と考えるのが妥当である。実は、喉を噛み切られ重傷を負った野良猫を拾ってきた時には、我が家には「先住権」を得たウサギが既に住んでいた。猫は大手術後3日間入院し、その後1カ月ほど通院した後元気を取り戻した。その間ウサギは隔離された玄関近辺だけに閉じ込めてあった。

野良猫を保護するにあたり一番心配したことがウサギの安全確保の問題であり、同じ屋根の下に長期間フタリを同居させることは当然不可能だと考えていた。そこで、元気になったらすぐに、何とかヒトリで生きていけるだろう、と心を鬼にして何度か外に逃がそうとしたが戻ってきてしまう。その健気な姿が不憫で愛おしく、手放さない決意をしたものの、はたしてどのように同居させるか思案に暮れた。熟慮の末、2階の一部屋にモカを住ませドアをロックし、1階で猫を自由に動き回らせることにした。（それまでは情が移ることを避ける

ため動物病院の診察券上の名前欄は空欄であったが、この後やっと「未録（ミロク）」と命名した。）その数ヵ月後、捨てられた5匹の子猫を里親が見つかるまで保護したこともあるが、その時は生後2週間程度の子猫のため全く危機感はなかった。

ミロクは2階の物音に興味を示し、ドアの前で正体を確かめようとしたり戦闘態勢になったりする。そんなそぶりを見せるので一層不安になり、一瞬でも遭遇させないようにすることは勿論、モカの存在さえ悟られないようモカの部屋に入るときはいつも細心の注意を払った。そんな生活が2年ほど続いたが、ミロクのモカへの興味は日に日に増していき、ドアの外でいつも待ち構えている。我々は益々危機感を抱き遭遇させないようにすることで難儀する毎日であった。

実はモカにも生死を分ける重大な事故に遭った経験がある。嘗てリードを付けて子供たちと公園で散歩中に、同じく散歩中の犬（フレンチブルドック）が急に近付いてきてガブリッと頭を噛まれてしまったことがある。家族で祈るような気持ちで即動物病院に駆け付けたことは言うまでもない。頭だけでも数倍もありそうな大きな犬に頭を噛まれたため、頭には無残にも2か所牙の跡が残り、最悪の事態も覚悟しながら容態を見守った。

このフレンチブルドッグの起源には諸説あるようだが、イギリスのブルドッグが原種であるという説が有力らしい。陽気で温和な面もあるが、過去にはフランスでネズミ駆除にも利用された犬で、噛みついて振り回す習性もあるそうだ。この時も何度か通院し、当分の間は余談を許さない状況が続いたが、噛まれた後振り回されなかったのが幸いして、懸念された失明などの後遺症もなく無事に生還を遂げた。

2年間ほどは隔離生活が続いていたが、ある朝気がつくと2階のモカの部屋のドアが開いたままになっていた。しかも、当然ミロクは部屋に入り込んでいて数時間は経過していたようだった。遂にあってはならない事態が発生してしまった！悲惨な状況を覚悟しながら部屋に入ると、何とミロクはモカに危害を加えることもなく二人は恥ずかしそうに少し離れた所から様子を窺っている。しばらくすると、お互いを舐めあったり、臭いを嗅ぎあったり、鼻を突き合わせたり、仲良く寄り添ったりするようにまでになっていた。二人がすっかりリラックスモードでくつろぐようになるまでに長い期間はかからなかった。

それでも、万が一の事故が心配でフタリだけにすることは避け、必ず家族の誰かが監視して一緒に過ごさせる所謂「お試し期間」の状態が半年以上は続いた。「監視員」は読み物でもしながら、不測の事態が起こらないよう見守るわけだが、少しずつ監視時間を短くしフタリだけで過ごす時間を徐々に増やしていった。この間様々な試行錯誤、紆余曲折を経て、遂に24時間同じ部屋に閉じ込めておいても大丈夫だろうとの判断に至り、同室で暮らし始めた。同室に閉じ込めて半年以上経過した頃には、ミロクはモカを眺めているだけで満足そうだし、モカは返って元気になり、お互い寧ろ喜んでいいる状態が続いたのである。フタリ共、他の動物に噛まれ重傷を負い、辛い体験をしたもの同士である。同病(傷)相憐れみ、お互いを慮る気持ちを芽生えさせていったのかもしれない。艱難辛苦を味わった野良猫生活が優しさや思いやりの心を育んだのかもしれないなどと勝手に互いの気持ちを忖度している。かくしてフタリは日毎に仲睦まじくなっていったのである。

その間、トイレは共同(男女兼用)となり、やがて水飲みも同じ食器を使い、ウサギは猫と同じ飲み方を覚え、頭を突き合わせて一緒に飲むようになる。本来はウサギと猫のトイレは全く違う砂(吸収剤)を使い形状も異なる。上向きに吸いつくように飲んでいたウサギと舌で掬い上げて飲む猫とでは水の飲み方も違っていった。それにも拘わらず、何の不便さも感じないかのようにトイレも水飲み場もネコ方式に統一して共同使用している。最初の頃はしばらく各自のトイレと水飲み場を用意していたが、同居中はその必要性はなくなり共同トイレ、共同水飲み場だけにした。この方が、手間がかからなくて助かる。珍しいケースかもしれないが、こんな経緯と事情から仲良くなったわけで決して合成写真ではない。ミロクは閉じ込められるのは好きではないので現在は「別居」しているが、毎日モカに会うため部屋を訪れ、しばらく一緒に過ごして戻ってくる。万が一にもあり得ない話だが、キャビット(cabbit)が誕生するような奇跡が起こったらご報告したいと思う。

寺垣スピーカーと動物の反応2

前回、わが家のネコは生演奏や寺垣スピーカーから流れる音楽が大好きだと述べたところ、本当に猫が音楽など聴くのかという疑問をお持ちの方がおられた。家族の弾くピアノ、ヴィオラ、ヴァイオリンの音色を気持ちよさそうに聴

いていたり、ピアノを弾き始めるとピアノの上に飛び乗り、寝ころんで目を細めてリラックスしている。以下の話からも、我が家のネコだけでなく、他のネコや動物も楽器の音色が好きなようなので私の独り善がりでも思い込みでもないようだ。ミロクが楽器的な寺垣スピーカーの音色を心地良いと感じ、好むのは従来のスピーカーとは異なる楽器と同じ発音方式や猫の可聴域の高さが大きな要因ではないかと妙に納得がいった。

愛猫家で知られるフジ子・ヘミングさんの御自宅では沢山の捨て猫を拾って育てておられる。やはりネコはピアノの音色が好きのようだし、ネコは幸せを運んでくれるとおっしゃっていたような記憶がある。また、飛べないハトを助けてピアノを聴かせたらハトが踊っていたそうである。

著名なピアニストの小山実稚恵さんはピアニストのアルトゥール・ルビンシュタインから頂かれた「ルビン」と「マルコ」という名の2匹のネコ（どちらもアメリカン・ショートヘア）を飼っておられる。ルビンちゃんはピアノが大好きで、彼女が練習をしていると目を細めて上を向き、何とも良い表情で聴いているようだ。そして、曲を通して弾いたときは、最後の音が終わると「ニャン」と鳴くそうである。ピアノが終わるとちゃんとわかって反応するのはミロクととても似ていて思わず頷いてしまう。

純正律音楽研究会ではペット(犬)のためのコンサートを行っている。ペットを前にしてヴァイオリニストの玉木宏樹氏が演奏するという、大変豪華で贅沢なコンサートである。気持ち良さそうに聴いていて演奏が終わると「ワンッ！」と鳴くようだ。猫も犬に劣らず演奏後の反応はなかなか立派なものなので、ちゃんと揃って大人しく聴いてくれるなら猫のためのコンサートも考えられなくもないが、流石にこれは実現するかどうか？

前回、寺垣スピーカーに対する他の動物の反応についてご報告する旨お伝えしたが、今回はカラスの反応を報告したい。ペットを含めた冠婚葬祭のセレモニーホールを運営されているお客様から寺垣スピーカーのご感想を頂いた。その中で、寺垣スピーカーとカラスの反応や純正律音楽についても言及されている部分があるので、お客様の声から原文のままご紹介させていただきたい。いつもなら、カラスは舞い降りてきてお供え物を漁るのに、物理現象の応用により自然音を発する寺垣スピーカーで音声を流していたところ、カラスは泣き喚くだけで、下りてくることもなく、いつもと違う雰囲気を感じ取っていたよう

だ。この雰囲気は人間も感じる臨場感、空気感であり、快感や癒しにも繋がる何かが含まれているのではないだろうか。

『ペットの合同供養祭で使用するため、11月26日より寺垣スピーカーを会場内に設置しました。曲は、玉木宏樹氏による「光の国へ」の純正律音楽CDを使用しました。25日に少し慣らしをし、26日は準備のため深夜まで作業をしながら寺垣スピーカーSP200を聞いていました。

28日当日は、マイクセットに寺垣スピーカーを取り付けましたので、BGMとアナウンスと住職のお経のすべてを寺垣スピーカーから音を出すことができました。

私の印象としては、本当にあの世に行ってしまった、今からお経があがる前の様子を見ている様な、別世界を感じさせる場の空気がありました。その場が音の渦に巻き込まれて、妙に宗教的一体感を感じ、女性スタッフも緊張感が高まった様です。その結果、お経が終わった後に再びBGMを掛けるはずが忘れていました。

私は、お経がはじまり、何気なく外を見ていると、外に慰霊の塔があり、ペットたちが好きだった食べ物が参列者によって供えられていました。いつもなら、カラスが大はしゃぎで食事タイムなんですけど、不思議とカラスたちは高い木の上で鳴き喚くだけで、下に降りて来れない様子でした。

やっとの思いで降りて来ましたが、私の姿がちらりと見えたのか、急いで逃げて行きました。

寺垣スピーカーの音が外のカラスたちには、どんな風に聞こえていたのでしょうか？

数日たって、供養祭に参加された方がいらっしゃって、当日の印象を語って下さいました。「中に入った途端に、いつもと違う感じがして気持ち良かったです。」と69歳の奥様が語って下さいました。この方は、毎晩ヴァイオリンの曲を聴きながら休まれる程、音楽が好きだそうです。

終わってみれば、参加者の気持ちのスイッチを切り替えてしまう程のBGMには、大変驚きでした。それと、寺垣スピーカーから流れる純正律と言う旋律は響きがとても気持ち良いと思いました。』

ご利用のお客様から「寺垣スピーカーは良い意味で不思議なスピーカー」だと

よく言われる。寺垣スピーカーはその場の空気までも変えてしまう神秘的な力を備えていると言えるのではないだろうか。しかし、特別な細工がしてあるわけではなく、それは自然界の持つ能力そのものではないかという気がしている。

純正律音楽研究会会員の皆様へ寺垣スピーカーの特別販売

当社は寺垣スピーカーの特別販売会社として認定され、この寺垣スピーカーの殆ど全てを販売している。私自身も最初に寺垣スピーカーを聴いたときの衝撃と感動が忘れられず、コンサートの生演奏を再現できるスピーカーとしては最高レベルだと確信し、この商品の販売に携わることとなった。私の家族はピアノ、ヴァイオリン、ヴィオラを演奏したり、コンサートに通うことは多々あったが、スピーカーで音楽を聴く習慣は殆どなかった。ところが、寺垣スピーカーに替えてからは毎日のようにこの「生演奏」を聴くようになった。

「寺垣スピーカーは性能面では、一桁高い価格でも売れるのではないか。知名度で随分損をしている」と指摘されることも少なくない。欧米の最高級メーカーの音を聴いて満足され自慢していた方も寺垣スピーカーの音を聴いた直後から黙ってしまった話などよく耳にする。根強い人気があるものの、知名度が比較的低い今こそ購入希望者にとっては絶好のチャンスということではないだろうか。

この商品の特長を知れば知るほど、手に入れたくなるスピーカーであることは間違いないだろう。純正律音楽研究会会員の皆様には寺垣スピーカーの澄んだ響きの素晴らしさをご堪能頂き、いつまでも健康で心豊かな人生を送っていただきたいと願ってやまない。

以上

ご案内

会員の皆様には、会員特別価格を設定させていただきました。上位機種についてもご相談させていただきますので、お気軽にお問い合わせください。当社はお手頃価格のSP200とSP300については、ある程度在庫を確保しておりますので、今ならお待たせすることなく納品させていただきます。なお、万が一ご満足いただけない場合は返品も含めご相談させていただきます。音には絶対

的な自信をもっていますので当社は決して「買ってください」と申しあげることはありません。オーディオの音ではなくコンサートの音楽が聴ける方、気に入った方だけにご利用いただけるのが、私は勿論、製作者にとっても一番嬉しいことだからです。寺垣スピーカーのお申し込みは純正律音楽研究会事務局を通してお願いいたします。

それでは、お一人でも多くの方が「寺垣サウンド」（テラ楽器サウンド）の「生演奏」をお楽しみいただけることを心から願っております。

9月19日サントリーホールに参加して

玉木とみ子さんの友
純正律音楽研究会 正会員 小暮初枝

サントリーホールで開かれた「音楽で伝える大和の心」で、不思議な、楽しい、音楽のひとときを過ごさせてもらいました。最後のトリで演奏される玉木先生が、何ておっしゃるのかが、興味津々でした。案の定「人間の緊張もせいぜい一時間だな〜」「アレ、何ていう名前だったかな〜、オレンチ？ オレンジ？ オレンジチャ〜？ 不思議な、今までにない、ステージだな〜」と、にこやかなお顔でのお言葉に、私も含め、回りの方も手をたたいて喜びました。

大勢いらした観客の中で、玉木さんの「ふるさと」の演奏で、ポロポロ泣いていたのは、私だけだったかもしれません。

昨年亡くなった主人が、自宅で療養中、玉木先生のCD「ふるさと」を二人で聴きました。「歌詞カードが入っていないのは、聴く人、それぞれのふるさとが思い出されるからですって」と主人に云いました。主人はポロポロ涙を流し、「感謝！感謝！ふるさと、家族、そして、おれを、ささえてくれた人に、そして、玉木さんに感謝！」と言いました。久しぶりにいっぱい涙を流したので、さわやかな気分で、六本木を後にしました。

追伸、主人は、最後まで、前向きでした。仕事もゴルフも旅行も、元気な気持ち忘れませんでした。

又、演奏会におじゃましたいと存じます。

玉木先生ありがとうございました。

純正律音楽入門セミナーに参加して

サウンドアーティスト兼セラピスト
上原由美子

私はかつて、音楽教室講師をしていたのですが当時、平均律という言葉は知っていましたが、ある時、純正律という音律の名前は知りましたが、実際の詳しい差はよくわからず特に聞き比べをしたこともありませんでした。でも、最近あるきっかけから、更に様々な音律があることを知り、その要が純正律と言われる、古代の音律であることも知りました。それでネット上で検索をして、聞き比べを始めましたがなんとなくしか違いがわからない気がしていました。でも、そうして音律の聞き比べをするようになったある日、自分の耳の変化に気づく出来事があったのです。

あるイベントでたまたま、電子ピアノと尺八のコラボ演奏を聴いた時、電子ピアノの音が綺麗に聴こえず、尺八とも調律が合っていないようにも感じました。かつては自分でもよく弾いた電子ピアノの響きがとても居心地悪く感じたのです。それで、もっと音律の事を知りたくなり、友人から教えてもらっていた玉木宏樹先生のサイトをチェックし、セミナーがあることがわかって直前に時間が取れ、申込みました。

アットホームな喫茶店で開催された、そのセミナーは、音律にまつわる歴史やケルト音楽との関連など、興味深いお話の連続で音楽と音に関して、新たな世界の扉が開かれました。実際に生で平均律と純正律の3度音程などを聞き比べると、うねりや濁りの差は歴然としていて、普段なんて無頓着な音楽を聴いていたのだらう、と驚きました。

平均律が生まれた意味もあるのでしょうけれど、カレンダーなどと同じく人工的に無理やり平均化されたものは、矛盾や歪みが大きくなるものだろうと思います。それは、人間にとっても不健康なものなのではないでしょうか。純正律を始めとする、古代の音律は、自然や人間の本来の姿と調和しているので、耳を若くし、元気にするといいます。確かに、純正律などが使われている音楽に耳や感覚が開かれていくと本当の意味での音や音楽の透明感や、美しい響きに、より敏感になっていきます。それは、人の心の平和をもたらすものでも、

あるはずですが。玉木先生は、数駅の電車の発音音楽も弾いて下さって、街から不調和なサウンドを減らしていきたいと仰ったのですが、確かに、良かれと思って使われているものでも焦りを助長したり、必要以上の怒りを煽るなど実は、騒音に聞こえてしまうものが沢山あると、改めて思いました。

街を流れる様々な音楽が、心と感性を開く調和してものによって変わっていけば不要な争いは減り、人々の心にゆとりと思いやりをもたらすでしょう。純正律は、古い遺物ではありません。人々に優しさや美しさを喚起する古代から伝わる、素晴らしい知恵の一つです。この音律をもっと多くの人に知っていただきたいと思えます。

私自身も、もっと知りたいですし、聴くだけではなく創作などにも使っていきたいと思っています。そして、また時間が合えば、セミナーにも参加したいと思えます。

玉木先生と、関係者の皆様、素敵な時間をありがとうございました。

★ 純正律音楽入門セミナーのご案内

今年1月から純正律音楽入門セミナーを、毎月一回開催しております。9月からは場所を事務所近くの喫茶店「フレンズ」移しました。セミナーの内容は次回ひびきジャーナルで詳しくお知らせします。

★ 純正律音楽無料ダウンロードサービスのご案内

雑誌「壮快」に不眠、不安、頭痛、耳鳴り等に著しく効果があると紹介された純正律音楽を、作曲家、ヴァイオリニストの玉木宏樹グループが最大の力を結集して、全国の皆様に無料ダウンロードのサービスを始めました。

純正律音楽というのは、ウィーン少年合唱団を始めとする天国的にハモる美しい調律です。良い体調には純正律音楽、皆様ぜひ、お聞き下さい。

<http://www.tamakihiroki.com/>

曲目：第3の夢

雪柳

故郷

恋はマリオネット

早春賦

イベントレポート

9月17日土曜日

【第十回純正律音楽入門セミナー】

今回から、近くの喫茶店「フレンズ」のマスターのご好意により、場所を事務所から喫茶店「フレンズ」に移しました。当日は7名様参加で、純正律と平均律の聴き比べ、倍音の話、音律や調律の話、世界の純正律音楽 CD の紹介、最後に玉木の純正律音楽演奏と盛り沢山の2時間でした。今までは事務所開催でしたので、余りPRをしていなかったのですが、今後は、場所が「フレンズ」になります。20名前後は入れますので、多くの方に参加して頂きたいと思っております。



また、どんなに初歩的なことでもかまいませんので、お便りを下さい。次回のセミナーに反映させたいと思います。

9月19日月曜日

【音楽で伝える大和の心】

サントリーホールの小ホールで「愛と華の会」主催コンサートに、お箏の吉原佐知子さんと玉木宏樹がゲスト出演をしました。



10月31日月曜日

玉木宏樹の新曲【箏とオーケストラの為の小協奏曲初演】

「大学院コンチェルトの夕べ」洗足学園内、前田ホールにて。
玉木宏樹作曲、箏：五十嵐恵「箏とオーケストラの小協奏曲」
<恵方の旅>全3楽章が初演されました。

今後のスケジュール

2011年11月19日土曜日

純正律音楽入門セミナー

場所：事務所近くの喫茶店「フレンズ」午後2時から

料金：1,000円(会員特別価格500円)

ご予約：TEL03-3407-3726 FAX03-3797-5640

2011年11月26日土曜日

ハープとヴァイオリンの【純正律音楽コンサート】

会場：【ラ リール】(地下鉄丸ノ内線 茗荷谷駅 徒歩5分)

東京都文京区大塚 3-21-14 (Phone: 03-3942-2830)

日程：2011年11月26日(土曜日) 開場：13時30分 開演：14時

出演：三宅美子(ハープ)・玉木宏樹(ヴァイオリン)

入場料：3,500円(会員特別価格3,000円)

2011年12月17日土曜日

純正律音楽入門セミナー

場所：事務所近くの喫茶店「フレンズ」午後2時から

料金：1,000円(会員特別価格500円)

ご予約：TEL03-3407-3726 FAX03-3797-5640



おたより募集!

会報のご感想、ご意見、純正律音楽にまつわること等々、なんでもお寄せ下さい。たくさんのお便りを、お待ちしております。次号の【ひびきジャーナル】にてご紹介させて頂きたいと思っております。

〒106-0031

東京都港区西麻布2-9-2 NPO法人 純正律音楽研究会

お電話：03-3407-3726 FAX：03-3797-5640

e-mail：puremusic0804@yahoo.co.jp

<http://just-int.com/>

<http://www.archi-music.com/tamaki/>

平成23年7月25日

発行責任者：玉木宏樹

編集：相坂政夫